
京都市動物園インターンシップレポート

Internship report of Kyoto City Zoo.

山田 美波 *

Minami, yamada

平成 30 年 3 月 5 日～3 月 18 日のうち 10 日間、京都市にある京都市動物園で開催された飼育実習に、大学からのインターンシップとして参加した。この期間には他大学等の 4 人の実習生がおり、私と同じ飼育実習に 2 人、獣医実習に 2 人が参加していた。大まかに分けて、ふれあいチーム・ゾウチーム・キリンチーム・猛獣チームの 4 つのうち 3 つのチームを、それぞれ 4・3・3 日間のローテーションで巡回した。実習生 1 人につき飼育員の方が 1 人つき、マンツーマンでの指導であった。

実習最初の 4 日間はふれあい動物を対象とする <ふれあいチーム> に参加し、初日はテンジクネズミ・ウサギ担当の方と飼育を行った。掃除・給餌が主な内容だったが、休園日だったため体重測定や爪切り、保定の練習などを行なった。特にテンジクネズミは数も多く、1 匹ずつ名前が付けられていたものの個体識別はかなり難しかった。動物園ではそのため耳に入れ墨をしたり、毛並みや目の色などの特徴が書いてあるネームプレートを作ったりして確実に識別できるように工夫されていた。飼育員からは「掃除やほかのことで時間がなくても、動物を観察することは一番重要なので怠ってはいけない」と指導を受けた。

2 日目はゴリラ・ツシマヤマネコ・エミュー・クジャク担当の指導を受けた。ゴリラはこの園内で 1 番人気があり、力を入れて飼育をしている対象の 1 つであった。特にここでは環境エンリッチメントに力を入れており、ゴリラ 1 頭ずつの性格や行動を理解した餌の配置や休憩スペース、何よりも、より自然の環境に近い空間での生活を目指し、退屈しないように考えて作られていた。さらに来園者には餌を食べている姿が見やすいように、設置向きや来園者との距離が考えられていた。

ツシマヤマネコは繁殖のために来園者には見えないところで飼育されていた。肉食なのでこの園では馬肉と鶏の頭をヤマネコの口のサイズに合わせてカットし、のどに詰まらないように工夫したり、動くものを追いかける習性を利用して生きたマウスを餌としていた。

ゴリラの展示時間が終了した後、採血などを麻酔なしで行うためのトレーニングを離れたところから観察した。ゴリラは飼育員に言われるとおりに腕を出したり棒を握ったりしていたが、飽きると檻をつかんで威嚇してきたり、別の場所に行ったりしていた。飼育員は「根気強くするのが大事だが、無理にさせ

*九州保健福祉大学薬学部動物生命薬科学科 4 年生

てしまうとトレーニングが嫌いになるので考えている」と言っていた。

3日目はアカゲザル・タンチョウ担当につき、アカゲザルの餌作り・掃除・観察や「ふれあいコーナー」での実習だった。午前中の餌作りでは決まった餌分量を計測し・切り・バケツに詰めていく作業であったが、アカゲザルの場合匹数が多いので量も多く、準備にはとても時間がかかってしまった。さらに、高齢のサルが数匹いるので他のサルとは違う柔らかい餌を準備し、喧嘩にならないように離れた場所に配置した。

午後からは「ふれあいコーナー」でふれあい体験の全5回のうち4回を担当した。一度手本を確認してから自分でも練習をし、本番に臨んだ。来園者には「どうすれば動物のことを知ってもらえるか」を考えながら話をするのができ、私の言葉で説明できた。たった4回ではあったが、人前で話をするのが苦手な私が自信をもって話しができたのは、大きな成長だと実感している。

4日目、ふれあいチーム最終日はペンギン・オウム担当について飼育を行った。この日はテンジクネズミ・ウサギ担当が休みだったので仕事は多くあった。餌作りや掃除が主であったが、その中で「道具は動物のために常に清潔に保つこと」はどの飼育員も言っていた。感染症や菌を増やさないために気を付けているという。

ペンギンの給餌では冷凍のアジを水で解凍し、ビタミン剤を入れて与えた。冷凍のアジを使う理由として、寄生虫を殺す点が挙げられていた。またビタミン剤は全個体にあげなければならず、さらにプールに餌を投げ入れるため個体それぞれの性格と泳ぎのスピードなどを考えなければならないのでとても難しい内容だった。

5日目～7日目の3日間はゾウチームにつき、実習の中で1番内容の濃いものであった。前半の実習とは餌の量も掃除の量も比べ物にならないくらい多く、力仕事为主な作業だった。そして、今回は5頭いるゾウのトレーニングの見学と同居の練習の手伝いを行なった。トレーニングはゴリラと同様に、麻酔なしで採血などができるようにするため、また、同居の練習は繁殖をさせるために行っているとのことである。体の大きいゾウに近づき過ぎないように竹の棒を使い「前・後ろ・右・左・体・背中・耳・足・おしり」といった用語を使い分けながらトレーニングをしていた。飼育員は「トレーニングが楽しいと思えるようにおやつを変えるなどの工夫をしている」と言っていた。

同居の練習は来園者に危険が伴うため休園日に行い、<ゾウチーム>全員と獣医師の参加や、暴れたときに対処するための水をかけるホースさらには麻酔銃など最悪の事態を避けるために入念な準備を行う。実際に参加してみて、臆病なゾウや勇気のあるゾウなど、1頭1頭違った性格が現れていて同居は簡単にはできないものだと感じた。

この3日間はほとんどゾウ舎での作業だったが、ゾウ以外には爬虫類や両生類、ハイラックス、ツキノワグマ、ワオキツネザルなどのサル類の飼育もおこなった。爬虫類や両生類がいる「熱帯動物館」では温湿度の管理を徹底しており、

毎日朝昼夕方に測って記録をしていた。

そこで飼育されている蛇やワニはネズミやヒヨコを捕食するので、来園者がいない時間帯に生餌を与える。理由は、逃げ回る姿に「かわいそう」という声があるからである。また、食べる姿が惨酷にみえるからだそうだ。

ワオキツネザルなどのサル類やハイラックス、ツキノワグマでは、餌を作るときそれぞれの個体に合わせたものを作った。野菜や果物の好き嫌が多く、小さくしないと食べないなどの理由があるからである。また投薬中の動物がいたが薬の匂いや味に敏感であるため、味や匂いの強い食べ物に混ぜたりするなど、給餌に関して多くの工夫がなされていた。

8～10日目の最後の3日間はキリンチームにつき、清掃・給餌・トレーニングの体験をした。キリン舎はほかの獣舎と全然違っており、コンクリートの上に土が敷き詰められていて、さらに藁がひいてあった。これはコンクリートによって足を痛めてしまうケースがあることからクッションの代わりとして使っていると聞き、動物のことが第一に考えられている方法だと思った。また餌の大きさにも気をつけており、キリンの舌は長いが口はあまり大きく開かないため、枝についている葉などは食べられるが、乾草を固めたキューブの餌ではハンマーで小さくして与えていた。この作業をしてみて、地味な作業だがとても重要な工程であると分かった。

シマウマがいるグラウンドの外枠越して、キリンのトレーニングに実際に参加した。足元近くまで行ってのトレーニングでもあったので、大変緊張してしまった。内容は採血の練習として爪楊枝で首をつつく、人が触っても平気だと分かるように首や顔を触る、ということ飼育員さんが吹く笛の合図で行うものだ。爪楊枝のトレーニングでは、実際は針を刺さなければならないので、それに近くなるように徐々につつく力を強くしていくものである。このトレーニングの実施にあたって、首のどこに血管が通っているのかを理解することが重要であった。

キリンのほかにもシマウマやフェネック、フラミンゴ、レッサーパンダ、クマタカなどの動物を飼育した。特にフェネックの給餌では餌を隠したり、ボールの中に入れてたりして、楽しく退屈せずに餌を食べられるように工夫して配置した。またレッサーパンダは餌を手で握って食べるので、握りやすいように切り、来園者にも食べている姿が見えるようにした。

この10日間の実習では毎日違う担当者について多くの動物の飼育を経験することができた。「動物たちが楽しい動物園」をモットーに、動物それぞれの展示方法の意図や給餌の工夫、1つ1つの作業の意味など多くのことを学べた。実習の合間では、就活に役に立つことや相談、ほかの動物園のこと、どういった勉強が大事なのかなど、飼育以外の点も教えていただいた。それから他大学などの実習生との交流もあり、いろんな情報を交換できた。